

研究発表

夏目漱石の言語の使用から生ずる翻訳上の諸問題

Some Problems of Translation Arising from
Natsume Soseki's Use of Language.

アラン・ターニー※

Abstract

Perhaps the one thing which has caused me more trouble than any other when translating Sôseki is the fact that he very often varies his style. In *Botchan*, for instance, the protagonist says early on in the book that he does not have a very extensive vocabulary. However, at times words are used in this book which one would not expect the hero to know. In short, Sôseki is not always consistent. Sometimes it is *Botchan* talking, but sometimes it is obviously Sôseki-*sensei* to whom we are listening. The problem for the translator is whether to render this difference faithfully, or to make the *whole* of the language consistent.

Differences in style are particularly marked in *Kusa Makura*. There are, for example, *haibun*, *haiku*, *kanshi*, normal literary Japanese, colloquial language, dialect and English poetry. Moreover, some of the Chinese poetry is quoted and some is original.

In a word, with Sôseki, it is not so much what he says

※ Alan J. Turney [現職] 清泉女子大学教授

which is difficult to translate, but the way in which he says it.

まず、当然のことであるが、漱石としての問題より、その一步手前の問題を考えなければならない。つまり、漱石を読んで出てくる問題は、果して、漱石の言葉使いから出てくる問題なのか、それとも、日本語と英語の根本的な相違から出てくる問題であるかどうかということである。

まず、そういう問題について考えてみたい。私の意見では、一番、根本的な問題は、日本語の微妙なニュアンスは、その言葉の姿に含まれているが、英語の微妙なニュアンスは、その音に含まれているということである。だからと言って、日本語の意味は、全部、その漢字の形にあって、英語では、どういうふうに書くかということは、全く関係がないというわけではない。英語の場合、音から言うと、中立的な言葉があるが、その一例をあげてみると、walk という言葉がある。この walk という言葉を聞いても、英米人には、どういう歩き方をするのかは、わからない。なぜなら音にそのニュアンスが、含まれていないからである。ただ、動作のみである。speak, talk にも、どういう風な話し方なのかというニュアンスは、含まれていない。しかし、whisper には、[s]という音にそのニュアンスが含まれている。したがって、そういう特徴をもっている英語に、たとえ、音が同じでも、漢字でもって、それぞれのニュアンスを表せる日本語をどういうふうになおすかは、非常に、根本的な問題である。英語では、非常に丁寧に書く作家であれば、なるべく、不必要な副詞を避けるのである。たとえば、to plod は、to walk heavily という意味であって、詩の中であれば、to plod のように、一つの言葉に、その重さが含まれている言葉を使った方がよいと思う。逆に、日本語の場合、例えば、「おもう」という言葉があるが、その「おもう」という言葉を考えてみると、「思想」の「思」は「おもう」で「思想」の「想」も「おもう」で、又、この「懷う」もあり、これには、なつかしいというイメージがある。同じ「おもう」でも、言っている時は、その人が、敏感な人であれば、頭の中で漢字に直すかもしれないが、書く場合は、そのどれを使うべきかを考えなければいけないのではないかと思う。「思想」の「思」は、昔から、愛情

に関して使われてきた。人を愛している場合、「あなたのことを思っている」というように使う。その時は、いくら「おもう」でも「想」は使えない。それで、こういうニュアンスをどういうふうに英語に直すかは、難しい問題だと思う。このことは、特に、詩や、うたを訳す場合、問題になるが、しかし、詩のみならず、散文の場合にも、問題になる。たとえば、漱石の「草枕」の最初の一行は、「山路を登りながら、こう考えた」だが、普通の人に言わせれば、その次に出てくる「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される」が、問題で、一番訳しにくいところだと思われる。しかし、ここまで行かなくても、山路という「みち」をどういうふうに訳すかという問題が出てくるのである。これは「山路」であって、原文を見ると、足偏の「みち」であって、足偏があるからこそ、山路である。ここに「道」という字を使うと、高速道路になり、同じ「みち」でも山路でなくなる。もし、平仮名でそれを書いてみると、感じが違いただろうし、また、片仮名で書けばなおさら違うと思う。日本語の場合、どんな漢字を使うか、あるいは、漢字を使うか、仮名にするかは、大きな問題である。それをどういう風に訳すかは、その時には、問題にならない。そのそれぞれの「みち」にあたる言葉が、英語にもあるが、翻訳者としては、割合に微妙なところに注意して訳さないと、違訳とまで行かなくても、その味がなくなる。

英語と日本語は、この意味において大分違うという証拠の一つとして次のことを上げてみたいと思う。日本語の場合、非常に有名な言葉、良い言葉があれば、まず、達筆の人に筆で書いてもらって床にかける。しかし、英語の場合、いくら良い言葉でも、また、達筆の人に書いてもらっても、それが字で書かれたことによって、その意味はそんなに出ないと思う。昔は、よく、聖書からの句を、読むために刺繍にして壁に掛けたりしたことがあるにはあったが。日本語の場合は、書いたものは、いわゆる美術のうちに入ると思う。日本文学になると、美術的なところ、すなわち、目で見たところが関係があるのだが、これは、別の大きな問題である。英語の場合、良い言葉があれば、

たとえば、詩などは、美しい読み方がされているレコード等を聞いて味うのである。

今までのことは一般的なことだが、これから、具体的な話に入ろう。いわゆる日本的なものを、抽象的な意味でなく、具体的な意味で、どういうふうに訳すかは、難しい。つまり、誰のために訳すかをきめなければならない。読者は、日本に来たことのない人なのか、それとも、日本に来たことはあるが、日本語は、全然話せないのか、それとも、日本語も、達者で、日本のことにもくわしい人なのか、それを決めなければならない。後者の場合であれば、日本語で原文を読めばよいと思って、考えにいれなくてもよいだろう。

さて、二つの具体的な事柄をあげてみたいと思う。まず一つは、障子のことである。これにピッタリの言葉はないが、screenと言えらるだろう。しかし、屏風も screen だし、ふすまも、screenだし、色々な言葉が、screenになり得る。それ故、もっと、はっきりさせようとするなら、sliding screenと言えらる。しかし、見たことのない人であれば、鉄でできているか、木でできているかわからないから、sliding paper screenにする必要が出てくる。漱石の「草枕」の第二章には、よごれた障子が出てくる。障子を訳すのに一行位かかり、また、それに形容詞がついているとなると、大変な話になる。そういう場合、小説では、私は注釈を書くのは嫌いだが、日本語のままにして、注釈を書くより他にしようがないと思う。そういうわけで、英語にピッタリあてはまる言葉がないから困るのである。しかし、時によっては、あてはまる言葉があるからこそ困る場合もある。たとえば、火鉢、これは、辞引きをひいてみると、brazier ということになる。皆さんはどうかはわからないが、私の場合、brazier はバケツに穴をあけ、石炭をいれて、工事中に、その辺の労働者が、手をあたためるためのものであって、これは、部屋の中におかれ、男と女がいて、ちょっと、割合に良い雰囲気があるという場合の火鉢とは、全然あわないのである。雰囲気として、まったくあわないのである。だから、その言葉があるから困る。ないから困ると色々、困り方があるのであ

る。

さて、漱石の話になるが、私の経験では、翻訳者として一番困る原因は、漱石の文体にあると思う。また、その文体が、ところどころで、急に、変ることにもある。例えば、「坊ちゃん」において、坊ちゃんは、自分には教育がなく、余り良い言葉を知らないというが、これは、原文を読めば、真赤な嘘ということがわかる。つまり、その本を書いているのは、坊ちゃんではなくて、夏目漱石先生であって、たまには、坊ちゃんの言葉使いにあってはいるが、しかし、しばしば、どうしても、じっとしてられず、頭を出さずにはいられない学者の言葉使いになってしまっている。ここで、翻訳者としての問題は、どうしたらよいのかということである。そういう相違を英語で表わそうとするのか、それとも、英語として、統一させようとするのかということである。結論から言うと、私に言わせれば、やはり、そのまま訳さなければならぬと思う。そうでなければ、評論家になってしまうわけである。翻訳者が、評論家になればきりが無い。「草枕」の場合の文体の相違は、「坊ちゃん」におけるそれとは、また違う。「草枕」を分析してみると、先ほど上げた、

「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される」がその一例だが、俳文というものがある。漢詩もあり、漱石が、自分自身つくったものもあれば、引用しているものもある。普通の文語体、口語体、方言もあって、その上、おまけに英語もはいつている。

よく聞かれることは、外人は、はたして、「草枕」がわかり得るかどうかということである。私は、外人でも、勉強すれば、わかると思う。英語で読んでも、その内容は通じると思う。漱石が言おうとしていることは通じる。しかし、問題は、漱石の書き方であって、それを英語で表わせるかどうかは、今でも、問題に感じている。つまり、その哲学的思想より、その形式が問題なのである。ニュー・クリティシズムになると、形式と内容はきりはなせないものであるが、漱石の場合も、やはり、その両方を考えて訳さなければな

らない。先ほど述べたように、日本語と英語の形式が、大分、違うので、場合によっては、内容より、形式の直し方に力をいれなければいけない。つまり、

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される」を、考えてみると、そこに、非常に意味が、つまっている。それを訳す時、ダラダラの英語で訳せば、その良さがなくなる。もう一つ、その文には、日本語のリズムがある。そのリズムは、英語にないと思う。

英語の詩の場合、今世紀にはいると、例外もあるにはあるが、おもに、強弱調で、つまりストレスでもって行をはかる。あまり syllable ではかることは、昔からない。これは、非常に大きな問題になる。しかし、結局のところ意味を、翻訳者として、捕らえていれば、内容を伝えることができると思う。ただ、原文と同じ印象を読者に与えることができるかどうかは、疑問である。「草枕」の中にいろいろな詩がある。俳句を翻訳することは、常に、大変なことではあるが、しかし、この次に上げる例のような場合になると、ほとんど不可能といってもよからう。

「『海棠の露をふるふや物狂』の下にだれだか、『海棠の露をふるふや朝烏』とかいたものがある。鉛筆だから、書體はしかと解らんが、女にしては硬過ぎる。男にしては柔か過ぎる。おやと又吃驚する。次を見ると、

『花の影、女の影の朧かな』の下に、『花の影、女の影を重ねけり』とつけてある。

『正一位、女に化けて朧月』の下には、『御曹子、女に化けて朧月』とある。」

はじめて、このところを見て、翻訳しなければならないと思った時、自殺したい位だった。これは、俳句を訳すだけでなく、まず、もともと俳句を訳して、それから、その女性が筆を入れた俳句も訳さなければならないのである。訳すには、一応、訳したが、その結果には、自信がない。

漱石の場合は、先ほども、ちょっとふれたが、方言が、問題になる。「草

枕」と「坊ちゃん」において、「草枕」では、江戸っ子の床屋が出る。又、「ぞなもし」という方言もある。まず、翻訳する時に、問題として感じたのは、その方言を、どういう風に、どの方言であらわせるかと言うことであった。私は、イギリスだが、イギリスの方言になおせば、多分、アメリカ人にとっては、耳障りになるであろうし、又、その逆も言えると思う。耳障りというより通じないかもしれない。しかし、ただ、無視するわけにはいかない。

さいわいなことに、「坊ちゃん」の中で方言と言うと、「ぞなもし」を文章に加えることに限られている。まず、これをどういう風に英語に直すかが問題である。つまり、「ぞなもし」と言う言葉には、意味がない。ただ、方言であることを示す役割を演じているだけである。英語で、そのような言葉がないかと思って、色々、悩んだが、英国の場合、likeという言葉があるのに気がついた。文の終りに、なにげなく、likeという言葉を加えることがある。アメリカにも、そういうことがあるだろうとは思いますが、ただ、そのlikeは、やや、ニュアンスが違うかもしれない。しかし、イギリスでもアメリカでも、likeを入れると、話し方のレベルが落ちる。likeを、あらゆる文章に加えると、非常にくだくなる。だから、場合によっては、「ぞなもし」を訳さないで、その文は方言で言われたと言うことを、間接的に表わしたこともあった。たとえば、誰々が方言で言ったと言うふうに。

この方言にも関係があるが、漱石は、落語や江戸っ子のユーモアも、駄洒落も非常に好きで、「坊ちゃん」には、

「マドンナか小旦那かおれの知ったことじゃねえ」とか「バツカ雪駄かおれが知ったことじゃねえ」とか、こういった言葉がある。英語にも、そういうたぐいのユーモア、つまり、音が同じでも意味が全く違う言葉をpairとして出すこともあるので、右に引用した例を翻訳することは、全く、不可能ではないが、しかし、これから上げる例は、それこそ、翻訳者の悪夢のもととも言えるべき、方言で、駄洒落が言われているところである。

つぎの一節は、坊ちゃんが自分の教えている生徒にむかって言うところであ

る。

「『べらぼうめえ、イナゴもバッタも同じものだ、第一、先生捕^つまえて、なもした、何だ。菜飯は田楽の時より他に食うものじゃない。』とあべこべに遣り込めてやったら、『なもしと菜飯とは違うぞなもし』と言った。」

これを、一応、次のように翻訳してみた。

“You damned idiot! A grasshopper and a locust are the same thing. And while we’re about it, stop finishing every confounded sentence with ‘like’. It sounds like ‘tyke’, and if that’s what you’re trying to call me come straight out with it and don’t mumble.”

I thought that would shut him up, but no.

“Like and tyke are different, like,” he said.’

一言で言うと、一番大きな問題は、漱石の内容を訳すことにあるのではなくて、むしろ、漱石の言い方、ものの表し方、つまり、形式的な面を訳すのに、問題があると思うのである。

討議要旨

司会の長谷川泉氏（学習院大学）より、初期の多彩な文体と、後期の鬱銀（いぶしぎん）の如き淡々とした文体とをいかに区別して訳し出すかとの質問があり、発表者より、それぞれの文体のもつ雰囲気はなかなかつかめない。そこに翻訳の一つの壁がある。英語では出版すべきではないものがある旨の返答があった。